

まえがき

私が子供の頃より江戸時代というのは悪い時代であつたと教えられ、そのまままでの私の歴史観は其の上に成り立っている。

従つて、信長、秀吉、家康という戦国時代の英雄たちの素朴な評価はここから成り立っていて、どちらかと云えば家康はあまり好きではなかつた。

ところで、あることがきっかけとなり、日本各地に大量に残された「古文書」という膨大な民間資料を読む機会に恵まれ、及ばずながら読むうちに、私の、この素朴な歴史観が一変したのである。

凡そ江戸時代も文化について書かれたものは多いが、大方は富商や特定の支配階級について書かれたもので、名もない百姓や庶民について書かれたものはあまり見当たらない。

一方で、「古文書」に書かれた内容に脚色したり、嘘偽りを書いたもの等あるとは思えない。

そもそも日本の封建制は、秀吉による太閤検地により幕藩体制が定まり、確立されたと云われている。然らば、この封建制度とは、何かと云えばあまりよく分らない。土地を媒介として、国王、領主、家臣との関係が成り立っているとのことだが、日本の場合は、武士による統治という国内的要因が主になって形成されたということである。

これが、幕末になって、王政復古が叫ばれ、明治維新となり、代わって立憲君主制が布かれるに至ったのである。この段階で、かつての封建制度は、すべて悪として葬り去られてきたと教えられてきたのである。

明治二十三年に明治憲法が施行される二年前の明治二十一年に、かつての幕臣たちによる東京開市三百年祭江戸会が開かれ、この時の「江戸会誌」に次のように記されている。

「徳川家の事業にして、古今を通じ、世界に亘り絶無のもの二つあり、一は封建制度を大定し、権衡其の中を得、区画其の宜しきに適いたる事、是なり。一はこの制度に依りて、上下太平、二百六十有余年間、一兵を動かさざりしこと、是なり。」

国民待望の明治新政府に成ったが、国民に対して、公平、鰥寡孤独（夫や妻を失ったもの）、貧窮無告（貧しくとも訴える所を持たない）の民は賑恤（しんじゅつ、貧困者に金品を施しをすること）などと美辞麗句を並べたが、云った舌の根が乾かぬうちに、今度は禁止の字句が目立つようになつた。

やがて軍部の台頭により、悲惨な戦争に巻き込まれたのは誰でも知っており、あながち「江戸会誌」の記載が間違つてはいたとも思われない。

その結果、昭和二十年八月十五日、日本は第二次世界大戦に手痛い敗北を喫し、すべてを失うことになる。代わって、アメリカ主導の民主国家となり、全ての自由を得ることになる。中でも、善悪は別にして、二千年来、国民を強いきらずに結び付けていた農地の解放

が行われ、画期的な変革を遂げたのである。同時に、長年にわたって受け継がれて来た、日本の伝統文化もことごとく捨て去られることになる。

「徳川家栄華の夢、今は覚めたりと雖も、その功業はこれを滅せんと欲しても滅すべからず、二百六十有余年の間、わが日本の文明を撫育し鞠養したる其の徳沢は、吾人の祖先の現に浴し来れる所、吾人が子々孫々の将に記憶すべき所、わが国家の永く録して忘れざる所なり。」

その後、日本は資本主義の道をひた走り、とりわけ戦後万民の百姓を以って歓迎された農地解放は、その後、列島改造の名のもとに、日本中が土地投機の渦に巻き込まれ、同時に農業の衰退となつていった。そして、行き着いた先は、平成二年にバブル経済とも云われた土地や株などの投機相場が破たんし、以後「失われた十年」という不況の中に突入する。

「徳川家三百年執政の時は、日本従前の文明の最も進歩発達した時代なり。然るに維新の改革を経て、社会百般の事、皆変更し、制度、文学、風俗、美術の事、多く破壊せられ、其の存するもの極めて稀なり、而して世人また多くこれを知る無し、およそ文明の真相を知らんと欲せば、須らく上代文明の発達せるその沿革及び事情を知らざるべからず。故に若し徳川家執政三百年の事跡を收拾して之を伝へずんば、後世或いは望洋の嘆を發すもの多からん。」

封建時代の全てがよかつたとは言わない。とりわけ、女性に対する差別はその最たるものである。

しかし、この間に培われた文化の数々には、今の日本を顧みるにつけ、捨てざるものが多くあるのではないかと思っている。とりわけ、家族制度や、徒弟制度、教育制度、等々の改革は後の日本の発展の礎となったのも事実であるが、個人の自由の無制限な拡大により、かつて虐げられた女性が別の形で自らを窮地に追い込んでいるのではなからうか。

更に、近年の家族制度、農村の崩壊、とりわけ雇用関係の崩壊と個人の努力ではどうにもならない経済格差の拡大を見るにつけ、「望洋の嘆を」を以って、古文書を読みあさっている次第である。

著者

参考文献

幕臣たちの明治維新：安藤優一郎著：講談社